島民が支えた青島バレー

青島バレーが強かった理由のひとつに、島民の協力がありました。ここでは、青島バレーへの島民の協力と、青島バレーの伝説のコーチ「郵便まーちゃん」を紹介します。

▲試合前の練習。島民が相手チームに入り、気合を入れます。

島民みんなで練習・応援

体育館で行われる練習風景。現在の生徒の親もほとんどがバレーボール部OBで、島のほとんどの人がバレーボール経験者という青島の体育館には、たくさんの島民の声が響いていました。

また、試合のたびに島民が応援にかけつけ、多くの声援を試合会場に響かせていたのです（写真下）。

これは、バレーボール部結成当時から変わりなく続いてきた光景です。

郵便まーちゃん

故　田口芳正（よしまさ）さん（享年 36 歳）

青島中学校・猶興館高校鷹島分校でバレーボール部に所属。

高校卒業後、郵便集配の仕事に就く。郵便集配の仕事が終わった後は、毎日バレーボールの指導に明け暮れていた。島民からは「郵便まーちゃん」と呼ばれ、慕われていた。

バレーのおかげで一致団結できました

田口　邦博（くにひろ）さん（星鹿・青島、59 歳）

私は、中学時代にバレーボール部に所属。子どもたちも、小・中学校とバレーボールをしました。

子どもたちの練習のときには、保護者のみんなで指導をしていました。たくさん人が乗れる車も買って、よく遠くまで練習試合などに行ったものです。

バレーボールのおかげで、部のみんなや保護者同士の輪ができて、一致団結できたと思います。

バレーボール部がなくなると寂しくなりますね。

青島バレー伝説の熱血コーチ 郵便まーちゃん

青島中バレーボール部発足時からバレーボールをし、バレーボールをこよなく愛した「郵便まーちゃん」。

高校卒業後は、毎日熱血コーチとして中学生にバレーボールの指導。野外での練習にも関わらず、生徒がひざから血を流そうが、きちんとレシーブができるまでボールを投げ続ける熱血ぶり。「ボールは赤ちゃんと思って大切にあつかえ！」などの名言を残す郵便まーちゃんの墓前には、現在も部員たちが大会のたびに訪れています。

◀▶郵便まーちゃん（当時21歳、左写真は前列中央）。昭和39年9月撮影。（写真提供：辻川康充（やすみち）さん）

バレーボール一色の人生でした

郵便まーちゃんの妻

田口　松子（まつこ）さん（志佐・高野雇進、59歳）

郵便集配の仕事が終わると、あとはバレーボールの指導に毎日明け暮れていました。バレーボールと指導している子どもたちがとても大好きな人でした。

毎日遅くまで指導をしていたため、私と一緒に夕食をとることが少なかったように思います。主人の人生はバレーボール一色でしたね。

主人が亡くなって28年がたちましたが、バレーボール協会の方々が「田口杯」という大会を立ち上げ、存続していただいていることに、とても感謝しています。

▶試合のたびに、早朝から郵便まーちゃんの墓前でスクラムを組み、気合をいれるバレーボール部の伝統行事。バレーボール形の石に手を当て「青島ファイト！」。

郵便まーちゃんは妥協を許さないプレーヤー

田口　信行（のぶゆき）さん（御厨・川内、59歳）

私が高校卒業してからは毎年、松浦市連合青年団バレーボール部で県民体育大会や県青年大会などに松浦市代表チームとして出場していて、郵便まーちゃんと一緒にバレーボールの練習をしていました。

大会前には、青島で一週間ほど合宿。中学生と一緒に練習をしていましたが、郵便まーちゃんは妥協を許さないプレーで、自分にも部員にも厳しくバレーボールと向き合っていましたね。

合宿中は、朝からみんなで定置網漁の手伝いをして、取れた魚を食事のおかずにしていました。とてもいい思い出として残っていますよ。

▲今年3月に開催された田口杯中学生の部で優勝した青島中男子バレーボール部

郵便まーちゃんの記念大会 田口杯

当時のバレーボール協会の会員が、田口さんのバレーに対する遺志を受け継ぎ、松浦市でのバレーボールの発展を目指して、田口杯というバレーボールの大会を立ち上げました。

これまで、一般の部は28回、中学生の部は27回開催され、市内外の多くのチームが参加。松浦市のバレーボールの発展につながっています。